

# いの流水俳壇

松尾 満津於選

## 「立夏・当季雑詠」

夏立てり以下同文の感謝状

間 浩一郎

(評)立夏は大概五月の初旬の頃である。官庁の年度末は三月であるので、四月になると新しい年度の事業が開始しはじめる。この句の感謝状は旧年度までの功績に対して勞いの賞状であろう。以下同文とあるのは他にも同じ内容をもつ功勞者があったことを意味している。立夏に相應しい時宜を得た句である。

## 泣き虫の子へ先にやるサクランボ

岡本とも子

(評)サクランボは、桜桃の果実で、甘く、やわらかく上品な味がする。情景が眼前に浮かぶように如何にもほほえましい、が「子へ」先にやると表現すると親の顔がハッキリ見えて、子の顔がボヤける。「子が先もらう」とすれば子が鮮明に見える。この句はこのままでも情景はよく解るが、助詞を、へとするか、がにするかによって句の内容が変わるということも検討に値すると思うのだが…。

駄目としか言えないトゲばかりの薔薇ばら

秋田 律子

(評)作者の俳句歴を聞いてみると、可成り蘊蓄うんそくを傾けて精出してゐる様子が伺われるが、どちらかというところ現代系の作風であるので、言葉のリズムとか季語の取り扱いに、若干のズレがあるようである。原句を読み下してみると、上五・中六・下六音になって言葉の切れが悪くなる。伝統俳句のリズムで云うと、中六語を「言えない薔薇の」と置き換え下五を「トゲばかり」と言い止めることとなるが、如何だろうか「味も素気そけもない」と言われればそれまでだが…。

人心の荒れて受難のチュリップ

津田 久美

(評)花に託して人の心の荒びを訴えている。心ない人間の仕業で花が折られる。花には何の罪もないのに何故…折角丹念のチュリップ、このリアリティはまことに悲しい限である。

初夏の街少し派手めの服を着て

森元二美子

(評)初夏は衣更えの季節である。少し派手めの服を着てお洒落姿で街へ出た。若く見せたい、若く在り度いと思う心は万人に共通することで、恥ずることも卑下することでもない。殊に女性である以上当り前のこと。思い切り羽根をのばすことが出来るのもこの季節。

鯉幟二十六戸の屋根を抜き

大川 節弥

いくつもの山ふくらませ夏来る

刈谷 志津

菜畑に一ト日独りの立夏かな

竹崎 光子

夏に入る代田の水面かがよいて

川村 博子

香を放つ風のジャスマン空碧

友草 水月

糠床の天地を反す立夏なり

井上 郁子

家中の戸を開け放つ立夏かな

中野 好子

名木へ移りゆくなり藤の花

川上こよね

黄金週間孫と川原で石遊び

森岡 照月

雀にも一家養う権利あり

楠目 哲郎

柿若葉萌黄の色の美しや

小島 良

見齋みはらす里に抱かれて鯉幟

松尾満津於

真白な産着に風や夏来る

伊藤 たみ

老鶯や青空高し伊予境

弘瀬うき子

ゆるやかに聞は動きて夏に入る

筒井 一平

傘さして蠓もの遊ぶ用水路

片岡 包

夫逝きて十年の夏振り返る

筒井 文

絵の如くたくましくとてフラフかな

川村 愛

次 題 「当季雑詠」  
締め切り 毎月15日

投句先

吾北教育事務所 上八川甲2010

☎ 867-2133

## 今月のことも川柳

花のせわ水がちよびりおいそ

下八川小2年 杉本みやび

おかあさん山までおさんほダイオト

伊野小3年 比嘉きょうか

ありがとうおかあさんにはかんしゃです

伊野小3年 森木 なゆ

あやまるとけんかしても なかなお

伊野小4年 大久保みほ

雨の日は中で静かに本を読む

伊野小4年 野村 菜月

桜の木 風でひらひら 花ぶき

下八川小6年 田中 三稀

